鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.15	斬新なJR九州の車両② (愛知県　老いぼれ銀ぎつね)

長崎へ向かう途中、肥前鹿島からの列車はシルバーの車体、前面の顔の部分と扉は赤、運転席と車内の隔たりと連結部分の扉は濃いブルーで統一してあります。

翌日は久大本線で大分～日田駅は1両の赤い車両、車内は白そして座席の肘掛、窓枠の下の部分運転席の後ろの握りこぶし等所々に木を使用してありました。お手洗いの手すりと鏡の枠も木でした。心憎い配慮です。

こんな車両もありました。運転席の後ろとドアの空間の天井には円形のパイプが設えてあり直径の部分にもパイプが貫かれています。それには一定の間隔でつり革が下げられていました。

工夫と遊び心一杯の車内、インパクトのある配色こんなセンスのいい車両をデザインしたのはどんな人なんだろうと思いを巡らす九州の各駅停車の旅でした。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.14	斬新なJR九州の車両① (愛知県　老いぼれ銀ぎつね)

どの鉄道会社も特急車両には趣向を凝らしていますが普通電車はなおざりにされているように思います。ところがJR九州は違いました。

昨年、小倉から日豊本線を走りました。
東別府～臼杵～佐伯間の列車に目を見張りました。車体は白、ドアーの部分は赤のメタリック、車内のドアーは黄色、丸くカーブしたお手洗いも黄色です。用を足す必要はなかったのですが興味津々入ってしまいました。

中は落ち着いたグレーで統一、もちろん安定したバリアフリーです。
客席は旅人には嫌われる7人用のロングシートなのですが、窓がワイドな一枚ガラスです。臼杵駅からは通学の高校生達も下車してしまいました。いつも海側に陣取る私もこのときばかりは反対側に掛け直し、パノラマの車窓を独り占めでした。

そして今年の九州攻略は博多からでした。新幹線から在来線のホームへ下りると真白い車体に絶妙のバランスで黄色と黒のラインが引かれた車両が入線してきました。この美しい”特急かもめ”にしばらく釘づけとなりました。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.13	名作『津軽』を旅して② (愛知県　老いぼれ銀ぎつね)

次の駅津軽浜名で乗車されたご婦人に飴を頂く、言葉を交わすうち愛知県から来たと言うと驚かれた。

車中で青森までの往復キップを求められたので「お買い物ですか？」と訊ねると、青森市内の病院へ月に一度通院しているとか。乗客はほとんど顔見知りのようで挨拶に忙しい。8割がた埋まった座席からは「OOさん近頃見んけど病気でもしとるんだべか？」などと聞こえてきて笑ってしまった。

次は太宰が津軽の浅草といった五所川原へ、一両のちょっとくたびれた赤い風鈴列車(冬はストーブ列車) メロス号が待っていた。　青田が波打つ津軽平野を二分して彼の生誕地”金木”へ終点の津軽中里へと走る。この駅から太宰は母と慕うタケに逢うためにバスで小泊まで向かったのだ。そんな感慨にふけりながら折り返す電車に乗り込んだ。

再び五能線で木造、鳴沢、鰺ケ沢と過ぎこの日の宿深浦へ、この地は旧津軽領西海岸の最南端、江戸時代には北前舟が風待ちをした港だそうである。小説『津軽』では太宰はここから鰺ケ沢へ引き返しているが、私は五能線を完乗すべく翌朝東能代へ向かった。

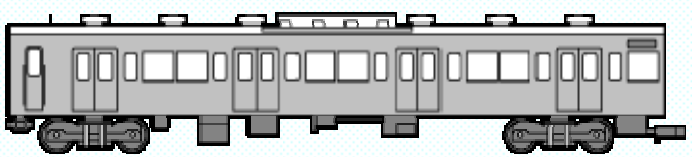
鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.12	名作『津軽』を旅して①　(愛知県　老いぼれ銀ぎつね)

　早朝、青森発6：03の普通列車に乗り込んだ。年季の入った車体や内装にかつては特急としてこの路線に君臨していたのではないだろうか。デッキには電話まで備えられている。先頭車両に乗客は私一人、缶コーヒーとサンドイッチを頬張って蟹田へ向かう。

　小説に「蟹田ってえのは風の町だね」とある。
その駅のホームにこの言葉を見つけた！次の電車まで30分ほどの待ち潮の香りに誘われて改札を抜けて駅から真直ぐの通りを行くと雨に煙る陸奥湾が姿を現した。
遠くに横たわる島影は下北半島か？

　電車の待ち時間知らない町をさまようこれもまた楽しみの一つ。
7：56津軽線終点の三厩駅着　8：06にはこの列車が折り返すことになるので駅の正面に回っただけですぐに車中へ。北の最果ての駅、通勤の乗客は皆無だが駅が進むにつれてお年寄りの乗客が増えてくる。



鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.11	真夜中の改札　（山梨県　ぐらーねさん）

真夜中の2時。甲府駅。
まさに草木も眠る丑三つ時に、改札へ行って青春18切符を差し出します。
「今日のはんこ、お願いしまーす」

差し出された駅員さんが一瞬わずかにひるんだのがわかりました。ただ日付のはんこをもらいたいだけなのに、なぜこの人はこんなにも動揺しているんだろう。
駅員さんは切符と私の顔を見比べ、ややあって口を開きました。

「……これからどの電車に乗るんですか？」
「ムーンライト信州ですっ！」
「そうですか……」

切符に日付のスタンプが押されました。しかし駅員さんは未だ首を傾げ、納得しかねる、といった様子。
考えてもみれば、こんな真夜中に女性ひとりでふらふらとやって来て「これから電車に乗って出かけます」という方が、ちょっと非常識で信じられないことだったのかもしれません。
嬉々としてホームへと下りていくその背中に声がかかりました。

「気をつけて行ってらっしゃい」

あ、駅員さんはあきれていたのではなくて、心配してくれたんだなぁ。
不安と気遣いを一杯に含んだその一言が、胸にしみたのでした。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.11	真夜中の改札　（山梨県　ぐらーねさん）

真夜中の2時。甲府駅。
まさに草木も眠る丑三つ時に、改札へ行って青春18切符を差し出します。
「今日のはんこ、お願いしまーす」

差し出された駅員さんが一瞬わずかにひるんだのがわかりました。ただ日付のはんこをもらいたいだけなのに、なぜこの人はこんなにも動揺しているんだろう。
駅員さんは切符と私の顔を見比べ、ややあって口を開きました。

「……これからどの電車に乗るんですか？」
「ムーンライト信州ですっ！」
「そうですか……」

切符に日付のスタンプが押されました。しかし駅員さんは未だ首を傾げ、納得しかねる、といった様子。
考えてもみれば、こんな真夜中に女性ひとりでふらふらとやって来て「これから電車に乗って出かけます」という方が、ちょっと非常識で信じられないことだったのかもしれません。
嬉々としてホームへと下りていくその背中に声がかかりました。

「気をつけて行ってらっしゃい」

あ、駅員さんはあきれていたのではなくて、心配してくれたんだなぁ。
不安と気遣いを一杯に含んだその一言が、胸にしみたのでした。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.10	鉄道 (福岡県　Aさん)

中学生の頃、私はよく家出をした。
継母になじめなかったが、特に家庭に不満があったわけではなく、とにかく遠くへ行きたかったのだ。
昭和40年ごろは静岡市に住んでいた。ここは東西どちらにも都合のいい位置にある。それに東海道線には支線が沢山あり、行きたい所に欠くことはなかった。

3年の夏、両親と些細なことで喧嘩してしまった。むしゃくしゃして家の金を持ち出し、鹿児島行きの切符を買った。もちろん鈍行(普通)列車である。
なんの用意もなかったが、心細い気持ちはなかった。鹿児島は父の故郷であり、祖父母が住んでいる。それが目的になって、両親の心配など気にもせず、むしろはしゃいでいた。当時はまだ蒸気機関車が主流で、硬い木で出来た座席はほぼ直角だった。石炭が燃えた煤よけに、窓には網戸が取り付けられているがあまり役に立たず、鼻の穴は真っ黒になる。

細かいことは忘れたが、何回か乗り換え、24時間過ぎたころに小雨の降る鹿児島駅に着いた。そこで初めて祖父母の連絡先を覚えていないことに気づいた。取りあえず駅前の旅館に泊まったが、金はないし、どうしようかと思っていたところに警察が来た。旅館の人がおかしいと連絡したのだ。家出人として警察署に連れて行かれた。無銭宿泊である。留置場に入れられた。狭く薄暗く、木の格子が罪の重さを示していた。

翌朝になると、やつれた継母が出迎えてくれた。涙ぐんでいた彼女は、顔を合わせた途端、私が吹っ飛ぶほどの強烈なビンタを喰らわせた。帰りの汽車で、どれだけ家族に迷惑をかけているかを切々と訴えられ、家族のなんたるかを心に刻んだ。今でこそ機関車は観光以外に使われることはないが、ゴトンゴトンと線路を走る列車の音を聞くたびに、今は亡き継母とその言葉を思い出す。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.9	えびの高原鉄道に魅せられて　(愛知県　老いぼれ銀ぎつねさん)

旅の三日目は都城から始まる。
ホテルのチェックアウトを済ませまだ眠りから覚めない街路を駅に向かう。南国といえども三月初旬の朝の冷気は頬を刺す。
都城5：43発吉松行き列車はすでに入線されていた。先頭車両に乗客は私一人。夜明けと共に雪を頂いた峰々が輪郭を現してきた。霧島連山である！

無人の改札口や古い駅の佇まいを見せて列車は進む。武家の若君のような名前の鶴丸駅を経て7：17吉松駅に到着。
ホームへ降りると「おはようございます」と箒と塵取りを携えた駅長さんのお出迎えに、びっくり！
改札を抜け待合室へ。しっかり暖房が効き、掃除の行き届いた部屋の中央には畳が設えてある。四方の壁には古くはこの路線こそが鹿児島本線であったこと等、この土地の歴史や史跡案内が所狭しと展示されている。駅前には以前、機関区でもあったことを示す機関車が一輌その名残を留めている。
（2日後に訪ねる予定の九州鉄道記念館の館長代理、Uさんは若き日この機関区で結婚式をあげられたと4日まえの新聞で知ったばかりであった）

次の人吉まではディーゼル機関車である。矢岳第一トンネルから第二トンネル間の眺望は見事。雪で薄化粧された霧島連山をバックにえびの盆地が広がりその中をゆったりと川内川がくねっている。ここは三大車窓の一つだったのだ。

急勾配に差し掛かり2回のスイッチバック、その度に若い運転手さんの後を付きまとい煩がられたかも？
真幸、矢岳、大畑（おこば）と懐かしい木造駅舎が続き魅了されどうしの”山の線”であった。
人吉10：02着　この駅は特急と観光列車が着く時に限り駅弁売りが登場する。
改札を出ると揚げ物を売る父娘に声をかけられた。コロッケと天ぷらを求めたが、からしレンコンも勧められ帰宅は三日後だということも忘れ買ってしまった。次は肥薩線で八代へ。この路線は”川の線”と言われているだけあって列車は蛇行する球磨川に寄り添いながら北上して行った。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.8	その時、すご腕車掌は働いた　（岡山県　Oさん）

今日も一日が終わり、毎日繰りかえされる行事のようにいつもの列に並ぶ。上りのぞみ号一号車後ろドア付近、列車の一番後ろだ。岡山から広島に転勤、サラリーマンの性である。単身赴任の道もあったが一人きりの生活より、のぞみ号を利用すれば今の住まいのままで通勤できるという精神的な気軽さもあって通勤することを選んだ。もう2年が過ぎようとしている。

今日も通勤時間帯の新幹線ホームは、いつものように自由席のドア付近はたくさんの人が並んで列車を待っている。

そんな時、後ろの方から小学生くらいの子供を連れた、目つきの鋭いご婦人がやって来た。列の前の方にどんどんやって来て、子供に何やら耳打ちし、ドアの来る当たりを指さしながら、子供に、列の間に横入りさせ席を取る段取りをしているようだ。その様子はいかにも不自然で誰が見ても「おかしいぞ」と感じさせるものであった。

私の前に子供が入って来たらどうしようなどと考えている間に、列車は定刻どおり、滑るようにホームに入って来た。席は空いているかな。ウン大丈夫、座れそうだ。ドアが開き、降りる人の後、列は進む。気持ちは完全に列車に向かっていた。

その時、「あのご婦人は、子供は、」と慌てて振り向くと、
既に車掌は列車から飛び出し、列とご婦人の間に立ちはだかり
ご婦人を諭し聞かせている。

一瞬の見事な判断力、アッと言う間の行動だ！！！
ルールを守る人、教える人、安心･安全への礎だ。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.7	秘境駅「久我原」下車と大多喜での出会い　（千葉県　久我原さん）

ある日の夜中、テレビを見ていたら「全国秘境駅ファイル」という番組が放送されていました。「秘境駅ってなんだ？」と興味を持ち、番組のホームページを見ると、私の住む千葉県には、いすみ鉄道の久我原駅という秘境駅があるとのこと。早速行ってみることにしました。五井から小湊鉄道に乗り、上総中野でいすみ鉄道に乗り換える房総横断一人旅です。

季節は早春、ほとんどの乗客がハイキングといった雰囲気の中、一人だけちょっとおしゃれなで明らかに他の乗客とは雰囲気の違う女性が乗っていました。乗客に声をかけたりして、何かの取材かな？と思いました。
上総中野でいすみ鉄道に乗り換え。黄色い1両編成のバスみたいな列車に乗り、いよいよ久我原駅です。当然誰も降りる人はいません、私を除いては。
緊張しました。駅で降りるだけなのに、何故か他の乗客から注目されているようで。

その後、早春の田舎を歩き回り、再び列車に乗り大多喜へと行きました。驚いたことに、そこで小湊鉄道から乗り合わせたおしゃれな女性に偶然再会！！「久我原駅で降りましたよね？」と声をかけられました。彼女も久我原駅に興味があったらしく、ホームページに旅のレポートを載せるので見て欲しいという様なことを言われました。家に帰って彼女のホームページを見てみると、なんと久我原駅で降りた勇気ある男性として私の事が書かれている！そしてこの路線が廃線の危機に直面していることも。せっかくなので私も自分の旅レポを彼女に送り、それをきっかけに大多喜町の方、いすみ鉄道サポーターズの方達と知り合えるようになりました。

私は特に鉄道ファンということではなく、この日も1日だけ一人旅、
平凡な休日で終わるはずだったのですが、
この女性との出会いで思い出に残る旅となりました。

その後4ヶ月の間に3回も大多喜を訪れることになるとは、
この時の私は思ってもいないことでした。

鉄道を巡る、ちょっといい話

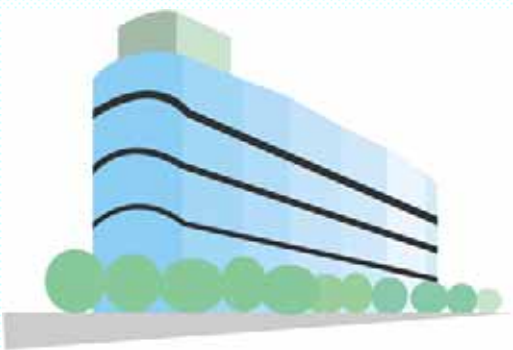
お話 NO.6	迷子（仮題）　（広島県　Tさん）

あれは43年も前(昭和40年)の事です。
広島駅の駅舎が駅ビルに生まれ変わる工事中で、改札口は仮設、売店も改札口のすぐ横の仮設売店、私は入社して間もない新米で、その仮設売店で販売をしていた時の事です。

あの頃は高度成長期で、売店も連日忙しく、周りに目を向ける余裕も無いくらいでしたが、ふと気が付くと、小学校低学年くらいの男の子が、心配顔で改札口の前に座っているのに気が付きました。

「どうしたの？」と声をかけると「僕、迷子になった」と言うので、放送室に連れて行こうとすると、「福屋で迷子になった」と言うではありませんか。「どうしてここで待っているの？」と聞くと、「河内から汽車で来たけん、また汽車で帰ると思ってここで待ってる」と言うので、これは大変、急いで先輩に連絡し、福屋デパートへ連絡してもらうと、連れの方が急ぎ来られて「近所の子供を預かって来たので･･･」と涙声。「デパートの中を探しても見つからず警察に届けようと思っていた」との事･･･これで一件落着しました。

時が流れて息子も成長し、孫があの時の男の子の年齢に達した今、あの時の男の子を思い出し、福屋デパートから市電でも十分はかかる距離、小さいのに本当にしっかりしていたな･･、と今でも感心しています。



鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.5	縁　～北斗星からつながったレール　（東京都　北斗星さん）

2005年、2月。

足の怪我をキッカケに仕事を退職した私は、退職金と自由な時間を使い、怪我を考慮した［歩かない旅＝列車を楽しむ旅］を計画しました。往路は北斗星、復路はトワイライト。この旅はとても素晴らしい旅となり、それまで全く鉄道に興味の無かった私が、すっかりと魅了されてしまいました。そしてもっともっと列車に乗りたいと思った私は、北斗星で働く事を決心しました。北斗星で働いた時間は本当に楽しい時間となり、多くの事を学びました。

その後北斗星の仕事を退職し、新しい仕事に就いてからも、私の鉄道への興味は無くなる事なく、北斗星時代の友人と共に各地の鉄道に乗りに行くようになりました。

そんなある日・・・

北斗星で働いていた時に、スタッフの中に「鉄道にとても詳しい」と有名な男性が居たのですが、とうとう一度も顔を合わせる事なく、北斗星の仕事を退職し、実家のある静岡へ帰ってしまった人がいました。一度会ってみたいと思っていた私は、共通の友人にお願いし、銚子電鉄に乗りに行くという企画に、その彼を誘ってもらう事にしました。そして2007年9月、とうとう彼に会うことができました。

半年間、同じ職場で働きつつ、一度も会ったことの無かった私達でしたが、二年という時を経て出会った私達はすぐに意気投合。数回のデートを重ね、東京駅の改札で告白をされ、お付き合いすることになりました。

東京に住む私と、静岡に住む彼。遠距離恋愛となった私達にとって、一番活躍してくれたのは新幹線でした。そして休みの日は色々なところへ出かけ、鉄道の写真を撮り、列車に乗り、模型を楽しみながら、鉄カップルとして、様々な形で鉄道を楽しみました。

そして2008年6月、新幹線の中でプロポーズ。来年の1月、私達は夫婦になります。

全てはあの日の北斗星に始まり、つながっていった縁。この縁に、心から感謝します。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.3　戦前の話　（岐阜県　Tさん）

子供のころ、人気の的は流線型のＣ－５３機関車だった。特急「つばめ」号を牽引していたが、本格的な流線型の満鉄「アジア」号とは違い、車体を流線型の鋼板でかたどった蓋った簡易ではあったが珍しい車両だった。

木曽川鉄橋と岐阜駅の中間で午後に上り下りの「つばめ」が行き違うので、小学校の授業が早く終わると線路まで駆けつけて飽かずに眺めては興奮していた。戦後はＣ－５３型の写真を見ることがなく、誰も知らないのは残念だ。

Ｃ53形45号機
（写真提供：ＪＲ西日本
（梅小路蒸気機関車館））

お話 NO.4　終戦直後の話　（岐阜県　Tさん）

神岡の捕虜収容所で終戦を迎え、岐阜連隊に帰任したら、しばらくして復員への統制のため臨時憲兵の腕章をつけ、武装したままで岐阜駅に派遣させられた。駅は恐竜のような二つの跨線橋の鉄骨とホームのみを残して焼け落ち、駅員は仮説テントの中で粛々と勤務していた。

名古屋西方の稲沢大操作場は壊滅していたので、岐阜駅で停車して給水する列車が多く、九州からは有蓋貨車で関東からは無蓋貨車で復員列車が続々と現れた。九州からの兵隊は新品の軍需物資を積み込み軍馬まで運んでいた。

９月に入るとマッカーサーが降り立った厚木飛行場の海軍航空隊員たちが客車で到着して、停車中に日の丸のついたタバコを持っていた。なんと前日に進駐軍から貰ったという「ラッキイストライク」であった。現代の鉄道ファンは知らない古くて懐かしい、大正生まれの鉄男の想い出である。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話 NO.2	夕陽を浴びた瀬戸内海（仮題）　（愛知県　老いぼれ銀ぎつね さん）

ある年、18切符の旅を終え、名古屋までの帰途、姫路から新幹線に乗り継ぎました、「あと一時間ちょっとで寂しい思いをさせている飼い犬に会える」、そんなことを考えていると、隣の席に座るアジア系の若い女性二人の歓声が聞こえました。明石、須磨あたりでしょう。彼方に夕陽を浴びた瀬戸内海が姿を現していました。

海が見えると心が躍るのはなぜだろう。
今回の旅のハイライトは、土佐くろしお鉄道「後免奈半利線（ごめんなはりせん）」の攻略でした。
瀬戸大橋線から土讃線、伊予池田辺りから大歩危、小歩危にかけて鮮やかなエメラルドの流れが続き、首を右に左にと目が離せません。四国の河はどうしてこんなに緑が深いのでしょう。待望のくろしお鉄道は雄大な太平洋を眺望できる区間が短く、ちょっと期待はずれでした。

翌朝、高知駅を始発で出発。
くねくねとした流れの四万十川と沈下橋を右に左に見せながら、予土線は愛媛まで走ります。次は、予讃線で松山まで、伊予長浜を過ぎると、少しずつ、海が見えてきました。線路脇の菜の花も、どんどん増えてきます。

左手にはプラチナをちりばめたような伊予難、前方行く手には満開の菜の花のアーチです。その中を列車は突っ切って走り抜けます。とても座ってなどいられません。運転席の横に釘付けとなりました。

あの風景を彼女達がみたら、どんな顔、どんな感嘆の声をあげるだろうと、新大阪で下車していく2人の背中を見送りました。

鉄道を巡る、ちょっといい話

お話NO.1	さみしくないよ　(愛知県　Tさん)

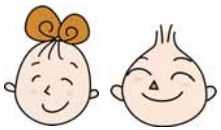
幼い頃、父の仕事の関係で、家族三人、大阪に住んでいました。おばあちゃんっ子の私なので、月に一度、祖母に会いに、名古屋に帰る鉄道の旅をとても楽しみにしていました。

景色を見たりおやつを食べたり、どんなことでも電車で過ごす時間は珍しく・楽しくて、「あっという間」に名古屋が近付き、ホームで待っていてくれる祖母の姿をみつけると嬉しくて、電車から降りるといつも飛びついていました。

しかし、数日後、当たり前ながら別れの時はやってきます・・・。ホームまで送ってくれている祖母と別れるのがさみしくてたまらず、同じ鉄道の旅なのに、帰りの電車の中は、私にとって行きとは別の空間でした。

今では一児の母となった私。足腰の弱くなった祖母と、当時の事をよく思い出して話しています。幼かった私は、帰りに送ってくれた祖母が、一人ホームに残された時の気持ちを想う余裕がなかったけれど、私と同じように相当さみしかったとの事。今では想像できます。

しかし、私が全く想像できなかった有難い事が・・・祖母の顔を覚えてくれた駅員さんがいらっしゃり、いつも一言二言声をかけて下さっていたようなのです。その優しさを「一生忘れられない」と話しながら涙ぐむ祖母の姿を目にし、温かい気持ちに満たされながら、私も感謝の気持ちでいっぱいです。



鉄道を巡る、ちょっといい話

※以下は、サンプルです

お話 NO.〇	ふと、あの「夏」を想う　(神奈川県　Oさん)

廣島に赴任して間もない頃の休日のことであった。

夏の日が容赦なく降り注ぎ、クマゼミの鳴き声が公園の森そして街路樹から沸き起こっていた。私はこの日、赴任して初めて廣島の路面電車に乗っていた。宮島に向かっていたのだ。私は長距離の電車の旅も好きだが、町の中をゆったり走り行く路面電車の小さな旅も大好きである。そこには人間サイズのスピードのままに、町の風景が飾り気なく移ろい行く大画面の車窓がある。

路面電車は廣島一番の繁華街、八丁堀、紙屋町を過ぎて大田川に架かる橋を音を立てながら渡りきっていた。幾つめの電停だったろうか、ふと見ると開いたドアの向こうから一人の老婦人が乗り込んでこようとしていた。しかし、上手く段差のある車内にあがってこられそうにもないのだ。そのときのことだった。妙齢のご婦人が座席から咄嗟に立ち上がるとその老婦人のところに降り、体を抱きかかえるように一緒になって車内に導き入れ、今まで自分の座っていた席をその老婦人に座らせた。そして少し離れた空席に自らは座ったのだ。瞬時のことだったが、私にとっては美しい御茶手前を見るような誠にすがすがしい光景だった。実にさりげない所作だった。言うまでもなく、この一事によってその日の私の小さな旅は特別な縁取りが与えられて、それこそ忘れ得ぬ思い出になろうとしている。

思えば、世は競ってバリアフリーを謳う。人が人を思う、助け合う、それが見も知らぬ他人であってもということは、とても大事なところだろう。「物」に支えられた便利さが加速度的に社会を変えていく今という時代。逆説的に場が薄れつつあると言われて久しい。しかし、人情に裏打ちされた庶民の生活は確実に存在している。東京の満員電車に揺られながら、ふとしたとき、あの夏の安芸の都で出会ったあの時の場面が美しい映画のシーンのように私の脳裏を去来する。